

ロベルト・ボラーニョ著、柳原孝敦、松本健二訳
『野生の探偵たち』(上) (下)

白水社 二〇一〇年四月

本書はRoberto Bolaño, *Los detectives salvajes* (Barcelona, 1998) の全訳である。本作品は、一九九八年、スペイン最大の出版社の一つであるアナグラマ社が主催するエラルデ賞を、一九九九年、ラテンアメリカの文芸賞の中でも最も栄誉あるロムロ・ガジェゴス賞を受賞した。また、英訳が出版された二〇〇七年には、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、ロサンジエルス・タイムズそれぞれの年間推薦書十冊に選ばれた。

作者、ロベルト・ボラーニョ(一九五三―二〇〇三)に対するスペイン語圏での人気は非常に高い。人気が高いということは、新刊が書店のみならず、スーパーマーケットや地下鉄駅前露天やキオスクにも並ぶということだ。例えば、二十万人がひしめくメキシコ・シテイの雑踏の中に、ボラーニョの本が並んでいる。ノーベル賞を受賞したガルシア・マルケス、バルガス・リヨサなどのラテンアメリカの存命の老舗作家たちが並ぶことは予想がつくのだが、新しい名前を見つけることはなかなか難しい。これほどの人気を獲得する作家が新たに現れたということは、スペイン語圏では久方ぶりの事件ではなかっただろうか。

売り文句には事欠かない本作品が日本語に翻訳され、出版さ

れたこともまた、一つの事件には違いないのだが、その魅力を手短にまとめることは難しい。原著で六百ページ、邦訳で八百ページに及ぶ本作品は、あまりにも長く、説明するために物語があちこちに飛んでいき、要約するのを拒んでいるかのようだ。おそらく、作者の目論見の一つはそこにある。しかし、ひとまずは、ベストセラーを読んだ気になってもらうのも、本稿の目論見の一つだ。

本作品は三部構成をとっている。この小説にあらずじというものがあるとすれば、この作品の第一部と第三部の展開がその糸を紡いでいるということになる。その箇所は、一九七五年十二月から一九七六年二月の間、主にメキシコ・シテイで、主人公の文学青年、ガルシア・マデーロによって書かれた日記という体裁を取る。文学部志望だったが法学部へと進学させられた、ガルシア・マデーロは、大学の詩作ゼミにこっそり出席する。そこで彼は「はらわたリアリズム」を自称する前衛詩運動に参加し、大学そっちのけで文学青年たちの集う街のカフェに入り浸り、若い女性たちとセックスに明け暮れる。ボヘミアン風の生活になじんだある日、娼婦のルペが、恋人のヒモ男に追われ、友人の金持ちの家へと逃げ込む。詩人仲間のたまり場になつていたその家は、ヒモ男のヤクザ仲間にも囲まれ、身動きが取れなくなる。家主でルペの愛人でもある建築家のホアキン・フオンテから愛車のインパラを託され、マデーロとルペ、はらわたリアリズムの中心人物であったアルトゥーロ・ペラーノとウリセス・リマの四人は、メキシコ北部のソノラ砂漠へと車を飛ばす。この逃避行には別の目的があった。その目的とは、「はらわたリアリズム」を標榜し、忽然と姿を消した一九二〇年代

の前衛女性詩人、セサレア・ティナヘーロの足跡を辿ることだった。四人は、ソノラ砂漠のある村で、古い込み、普通のメキシコ人女性になってしまったかつての詩人を見つける。そこにポン引き男の団が現われ、四人は命を狙われる。銃撃戦の末、ポン引き男と女性詩人が倒れ、四人は逃げおおせる。ペラーノとリマはその罪を背負い、メキシコの砂漠に消える。ここまで把握していれば、大方読了したふりをする事ができる。

詩人が砂漠に消えるとはアルチュール・ランボーを連想させるし、二人の男が消えていくなんで『イージー・ライダー』を匂わせるようだ。もしかするとこれはスペイン語圏アメリカ版の……などと思っていると、作品の中で二つとも言及されている。ランボーから『イージー・ライダー』に至るまで、時代や場所を問わない表象作品へのカルト的な偏愛からなされるこれらの引用とその脱臼が、この作品の大きな特徴の一つだ。訳者あとがきではその点について十分に指摘されているが、作品に散りばめられた間テクスト的要素が持つ喚起力は、読者が持っている情報量に比例して強いものになるだろう。読者の力量が試される。

間に挟まれた第二部では、砂漠に消えた二人の自称詩人、アルトゥーロ・ペラーノとウリセス・リマに関する五十三名の証言が並べられる。これらは一九七六年から一九九六年に取られたとされ、舞台は一九二〇年代のメキシコ、また、一九七〇年代以降のメキシコ、フランス、スペイン等の新旧両大陸にわたり、それらの挿話は多彩を極める。

舞台はかつて作者のボラーニョが放浪した場所だろうし、登場人物の多くは、彼がかつて見知った人々をモデルとしている

ことだろう。また、作品の端々に、イスパノアメリカで起きた歴史的な事件がうかがいしれる。ボラーニョの周りにもそれらに関係を持った人物たちがいたに違いない。本作品は、間テクスト的な要素と同じくらい、自伝的な挿話が散りばめられた長大な個人的記憶のコラージュとしても読み取れる。

しかし、本作品はただの自伝ではない。書くという行為、あるいは文学という営みへの強烈な意識が、作品の至るところに読み取れるためだ。何よりも、五十三名の人物たちの声を作り上げるといふことは、声に応じた文体を練り上げる行為である。個々の登場人物たちの語り口はいずれもどこか滑稽で、強烈な印象を与える。また、登場人物たちの多くは、文学にたずさわる何者かである。ノーベル賞詩人から創作への野心を燃やす詩人志望の若者たち、昔は文学に没頭していた古本屋の主人や元前衛詩人の代書屋といった人物たちが、二人の詩人のことはさておき、自分たちの人生についてあれこれ語りだす。彼らの創作したものが披露されることはなく、彼らが文学に取り憑かれた人生を過ごさざるを得ないことだけが示される。これをメタ文学と呼ぶにはあまりにも生々しい。青臭いともいえるだろうが、この作品において、文学は、生きることへの情熱を意味している。

登場人物の設定だけではない。訳者あとがきでも触れられているように、本作品の中で、登場人物の語っている事柄は、彼らに見えていたのか、見えていなかったのか判断としないように記述されている箇所が作品の中に散見される。ここでは、物語の物語らしさが危ういものになる。また、ボラーニョの文章には癖がある。「○」による表現を多用するのだ。作品において、

「〇」は、一度言ったことに対する注釈をしたり、言い訳をしたり、文脈とは関係ない思い付きを挿入したりするために使われる。何かを言明すること、断言することを避けるような言語の戦略だ。それは、意味がある地点に着地することを拒もうとする。「見えた」と「見えない」の間を揺れ動く、不安定なビジョンを描き出そうとしたのが、本作品ではないだろうか。

この問題に関連して、筆者が興味を抱いている一つのテーマがある。一九七三年九月十一日に起こった、チリにおけるピノチェトのクーデターとボラーニョの関係である。一昔前は「もう一つの九・一一」を思い起こさせ、近年では「ショック・ドクトリン」、または新自由主義的経済改革の起源として位置づけられるこの事件は、チリ人の若者であったボラーニョとかかわりを持たずにはいられなかったであろう。作者はかつてこのように紹介されていた。若き日のボラーニョは、家族で移住したメキシコからアジェンデ政権下の社会主義革命に沸き立つチリへと帰っていった。帰国したその直後に米国の支援を受けたピノチェト首班の軍部クーデターが起こり、ボラーニョは、大方の若者と同じように不穏分子扱いをされ強制収容所に収監された。暴力の嵐が予感される中、たまたま看守が高校のクラスメイトだったため、彼は収容所から出ることができ、難を逃れたのだという。本作品の中心人物の一人であるチリ人のアルトゥーロ・ベラーノが経験したことと全く同じエピソードだ。しかし近年では、この挿話は作家によって創作されたフィクションだと唱える者もいる。その説によれば、ボラーニョはクーデターの際、チリ国外におり、クーデター後の一連の惨事を体験することがなかったのだという。果たしてボラーニョは

「九・二」に何を見ていたのだろうか。

少なくともこのことは、表象の不可能性というテーマにも繋がっていくだろうし、ボラーニョの文体、創作原理と何らかの関係があることはおそらく間違いない。現実と記憶と虚構の間を行きつ戻りつしながら物語を紡ぐということが、本作品を貫く主題である。

本作品はボラーニョの代表作でもあり、異例の長編作品でもある。また、作品内部には、他の作品へと昇華する断片も散見される。もう一つの長編小説であり、遺作となった2006(2004)は西語圏英語圏いずれにしても非常に評価が高い。筆者が読んだ限りでは *Literatura nazi en América* 『アメリカ大陸におけるナチス文学』(1996)、『*Estrella distante*』『はるかなる星』(1996)、『*Amuleto* 『おまもり』(1999)、『*Nocturno de Chile* 『チリの夜想曲』(2000)はいずれも歴史的にもテーマ的にも興味深い題材を扱っており、ボラーニョの書き手としての異彩が際立っている。今後の紹介が期待される作家だ。

(高際裕哉)